

## 進空式

### AIONⅢ進空式 ― 初飛行を終えて ―

平成20年卒 前田賢一

2010年5月22日(土)。ASW28-18(AIONⅢ・JA06DW)が待望の初飛行を果たしました。私は森川監督による初飛行、宮地教官、三田村教官に続いて4番目に搭乗させていただき本当に光栄に思います。

ASW28-18は外翼を変更することにより、翼幅18m、15mのグライダーとして飛行することができます。滑空比は18m翼で48、15m翼で43です。全国大会では翼幅が制限されるため、15m翼での出場となります。

初フライトは18m翼で行いました。サーマルのない条件でしたが、計10発のフライトができました。

以下に搭乗した4人の感想を記します。主に他校が多く所有しているディスクス(Standard機)と比較しています。

#### 良い点

- ・滑空比がよい。滑空比48なので当然ですが、別世界の感覚です。
- ・ディスクス、LS8-18と比べても操縦が易しい(離着陸が難しくないので、他の機種から移行しやすい)
- ・失速はバフェットが明瞭で穏やかな失速特性。
- ・トリムが使いやすい。
- ・コックピットがディスクスに比べてゆったりしている。
- ・着座姿勢がASK23とディスクスの間くらい(学生の機種移行が容易)
- ・旋回の持続がしやすい。
- ・ダイブブレーキを使用しても姿勢変化が少ない
- ・タイヤがASK21と同じタイプのため備品を共有できる。

#### 悪い点

- ・前方視界が少し悪い。
- ・ロールレートがディスクスに比べて悪い(18mの場合)
- ・組立分解に時間がかかる、取り扱いに気を使う
- ・メインギアの格納に女子部員が苦勞する可能性がある。

以上は18m翼で飛んだ場合ですので、ロールレートや乗り心地を15m翼のディスクスと単純比較することはできません。しかし、高性能機ほど難しいとされる速度管理はトリム機構も手伝って易しく、旋回持続もし易いため操縦が非常に楽です。また失速特性も穏やかであることから、搭乗した4人とも学生レベルでも乗ることが十分可能であると感じています。15m翼でのフライトやソアリングコンディションでのフライトも試す必要がありますが、我が部にとってよい機体の選定であったと思います。これからの本格運用では教官、学生が協力してノウハウを蓄積していかななくてはなりません。また、前述したように「乗って飛ぶこと」は比較的容易だと思いますが、「乗りこなす」ことは別問題です。全国大会で優勝するためには、機体を乗りこなすまで経験を積む必要があります。そのためには学生のレベルを底上げして、できるだけ早くライセンスを取得し、ASW28での飛行時間を増やす必要があります。高性能機を手に入れたからこそ、それに見合った努力が必要とされます。この点に関しては、今後の課題であると思います。最後に、このASW28-18はご支援いただいたOB・OGの皆様、大学、機体選定から尽力いただいた森川監督、現役諸君を含むすべての皆様の想いの結晶です。歴代の機体と同様、末永く大事にそして有効に活用していただきたいと思います。

満を持して大空へ！

ASW28-18 AION III 1st FLIGHT

2010.5.22 木曾川



■写真上の3枚は、立命館航空部OB(H22年卒)で航空写真を趣味とされる上河 聡氏の撮影で、ご好意により提供を受けた。

■下の2枚はH12年卒水谷 修平君撮影



## 部員へ、 「えっ！ 愛称の意味を知らなかったって!？」

命名式の準備が進められている時、部員に「Aion ってどういう意味ですか？」と尋ねられて一瞬、「え〜っ!」と絶句してしまった。自分達の愛機、その愛称の意味・由来も知らずに乗っていたとは……。それで、‘96’とか‘256’とか‘354’と呼んでいたんだなと、初めて気づいた。ここに教えるから、今後は味気ない登録番号で呼ばずにちゃんと愛称で呼んでやってくれ。

### ■Aeolus(イオラス) 出典はギリシャ神話

その意味・由来は風の大王の名前。ギリシャ神話では東西南北をそれぞれの風の神様(東風は Eurus、西風は Zephyros、南風は Notos、北風は Boreas)が支配している。それらの神々を束ねる大王神が Aeolus である。風の神を味方につけて安全に飛行することが出来るようにという願いが込められている。

### ■Aion(アイオン、正確にはアイオーン) ギリシャ語(ラテン語では Aeon)

意味は、ある一定(途方もない長さ)の時間単位、古代ギリシャの哲学者プラトーンは「永遠」の意味で使っている。日本の禅の思想では「劫」という概念がこれに当たる。千年に一度、天女が地上に舞い降りて、大きな岩の周りを一回舞ってから天に帰る。その時天女の衣が擦れて岩が減る。こうして繰り返すうちに、ついにさしもの大岩も磨り減って無くなる。この時間を「一劫」という単位で表す。一旦離陸すれば長く飛んでいられるように、同時に航空部の伝統が何時までも続くようにという願いが込められている。

Aeolus、Aion とともに命名者は、時の部長小野 哲先生(現翔友会名誉会長)である。大空という大自然、人間の目には見えないその大気のエネルギーを利用して飛ぶグライダー、安全にしかもより高く、より長くフライトが叶うようにと、正に相応しい愛称である。以来、我が部の所有機は、複座は Aeolus、単座は Aion を継承し、それぞれに現役複数機がある時は、II、III、…と連番を付けることを伝統としている。

編集長 窪田 昌三